慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

平成29年　新年祝賀式開催

慶應医学100年の始まり 次世紀に向けて決意も新たに

医学部では、毎年新春を迎えて、教職員および三四会員による新年祝賀式を開催しています。今年も、1月5日（木）に慶應義塾大学病院2号館11階の大会議室で開催されました。

慶應義塾大学と親交の深い学校法人北里研究所から、小林弘祐理事長のほか役員の方々、また北里家を代表して北里一郎氏を来賓として迎え、冒頭に岡野栄之医学部長が年頭の詞を述べ、清家篤塾長、小林弘祐北里研究所理事長、武田純三三四会長、相磯貞和医学部教授（教職員代表）からそれぞれ賀詞が述べられました。

また、竹内勤病院長の乾杯の発声で始まったレストラン ザ・パークでの懇親会では、三四会役員の方々、関連病院会、医学部、看護医療学部等の先生方などが参加し、それぞれ新年の挨拶を交わし、親睦を一層深めました。

新年祝賀式と併せて「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金」に基づく医学研究奨励賞授賞式が行われ、香坂俊専任講師（76回）と笹部潤平専任講師（81回）の2名が受賞されました。

（撮影・石戸晋）

新年祝賀式の様子

小林弘祐北里研究所理事長によるご挨拶

医学研究奨励賞受賞者。後段左から、金井委員長、清家塾長、岡野医学部長。前段左から、笹部君、香坂君

北島政樹名誉教授（45回） Asian Pacific Society of Digestive Surgery（APSDS）会長に就任

北島政樹名誉教授（外45回）は、去る2016年11月のアジア太平洋消化器病週間（Asian Pacific Digestive Week：APDW）においてアジア太平洋州消化器外科学会(Asian Pacific Society of Digestive Surgery（APSDS）の会長に就任されました。

APDWはアジア太平洋地域の消化器関連学会、消化器病（APAGE）、内視鏡（A―PSDE）、肝臓病（APASL）、消化器外科（ISDS―AP）の4つの学会から構成されています。APSDSは構成学会を目指して新たに創設された学会であり、北島政樹名誉教授はこの初代会長となります。APDWは応募演題が1700を超える非常に大規模な学会ですが、ここ数年、消化器外科からの応募は極めて限定的で、消化器外科の参加者増と活性化が課題となっていました。その課題に向け、新たに消化器外科分野の学会を立ち上げる動きが構成学会から起こり、個人会員からなるISDS―APを改変し、各国の消化器外科学会を加盟会員とするAPSDSの創設となった背景があります。

北島政樹名誉教授は1902年創設の世界最古の国際的な外科系学会である万国外科学会（International Society of Surgery/Société Internationale de Chirurgie. ISS/SIC）の会長を務めた2007年のモントリオール大会の際、ISDSをISS/SICの構成学会に加えることによりISDSを再興に導き、また2007年から2011年にはISDSの会長を務められるなど、ISDSでの功績は枚挙の遑がなく、2013年のISS/SICのヘルシンキ大会では北島政樹名誉教授の名前を冠したKitajima Prizeが創設されました。同年のヘルシンキ大会ではISS/SICの名誉会員に推戴され、2015五年のバンコク大会において、学会定款の改定で新たに創設されたコート・オブ・オナー（Court of Honor）の初代メンバーに就任されています。コート・オブ・オナーはISS/SICの最高の裁定機関であり、数少ない名誉会員からさらに定員3名のみの極めて選りすぐられたメンバーが担う重責です。

北島政樹名誉教授が、APDW構成学会の会長及び役員からなる神戸での理事会でAPSDSの初代会長に推戴されましたのは、消化器外科のみならず外科学・消化器病学領域における国際的な功績、幅広い人脈と人望からと思われます。

国際医療福祉大学の副理事長、名誉学長として、新しい医学部の創設で多忙を極める中、さらに新たな学会の会長をお引き受けになったのも、アジア大洋州地域の医学界における消化器外科の発展さらに、わが国および慶應義塾の国際的な立場をさらに高めるためと推察しております。北島政樹名誉教授の一層のご健勝を祈りつつ、そのお気持ちに応えるべく後輩一同、気を引き締めて診療・教育・研究に向き合っていかなければならないという思いを新たにしました。

（和田則仁　外71回）

2016年度 慶應義塾国際化（SG）奨励賞決まる！

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業の指標に基づく個別の数値目標達成に貢献した教員に対して以下について表彰する制度として、慶應義塾国際化（SG）奨励賞が発足した。

（1）研究インパクトの大きな論文を書いた若手研究者
（2）多くの論文を生み出すラボを運営するシニア教員
（3）外国人教員等の指導教授を多く招聘し、学生の論文作成に結びつけた教員
（4）留学生受け入れの多い教員

以上が選考対象となった。

医学部からは（1）のカテゴリーで股野麻未君（内科学(消化器)）が、（2）のカテゴリーとして岡野栄之君（生62回）の2人が受賞した。

授賞式は、12月2日（金）、三田キャンパスにて、「慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート（KGRI）キックオフシンポジウム中に行われた。尚、KGRIは、大学のグローバル化をより一層推進し、世界に貢献する国際研究大学となるための基盤として、今年11月1日に設立された義塾の新しい研究組織である。

文責：安井正人（68回、薬理学、KGRI副所長）

慶應義塾国際化（SG）奨励賞を受賞した岡野栄之教授（生62回、左から2番目）と股野麻未君（内科学（消化器）、右端）、中央は國領二郎国際担当常任理事

猿田享男名誉教授（43回） 平成28年度の井村臨床研究賞を受賞

平成16年に京都大学元総長・井村裕夫先生によって、我が国の医学における臨床研究を推進するための新たな賞として井村臨床研究賞が設立された。

この賞の対象は（1）基礎研究の成果の臨床への橋渡し研究（2）疾患の病因や病態生理の解明と疫学（3）新しい診断・治療・予防法の開発などが受賞対象とされる。今回、猿田享男名誉教授は「約50年に亘る高血圧の成因と治療に関する研究成果」と平成7年から国が推進してきた「基礎研究の実用化促進のための橋渡し研究推進事業」のディレクターとしての功績が高く評価されて本賞の受賞となった。現在も我が国のトランスレーショナルリサーチの推進とその審査の要職を務めていらっしゃる。

受賞の正式な題名は「日本人における高血圧の特徴と最適治療法の研究及び日本の臨床研究の推進」である。

なおこの井村臨床研究賞を循環器内科の福田恵一教授（62回）が平成24年度に受賞されている。

（腎臓内分泌代謝内科　脇野　修　69回）

公　告

三四会員各位

慶應義塾大学医学部三四会の役員および評議員の任期は来る平成29年6月16日を以って満了します。三四会会則施行細則第12条により、三四会役員および評議員の改選を施行いたしますことを公告します。

平成29年2月20日

三四会会長　武田　純三

（本掲示を以って三四会会則施行細則第12条の公告に代えます）

慶應義塾大学病院　各種お問い合わせ先
・初診予約（午前９時～午後７時、第２・４・５土曜日は午後５時まで）
三四会ホットライン
TEL 03-3353-3034（ミオサンシ）
医療機関用
TEL 03-3353-1257　FAX 03-5843-6167
WEB「病院ホームページ」→「お問い合わせ一覧」→「医療機関の方へ」→WEB申し込み：初診外来予約フォーム（24時間申込）→医療機関からの初診予約申込フォーム
・検査予約（午前８時30分～午後５時）
PET/CT…TEL 03-5843-6165
SPECT …TEL 03-5843-7071
・予防医療センター：人間ドック（午前８時30分～午後５時）
TEL 03-6910-3533

慶應義塾大学医学部開設100年記念イベント 参加申込のご案内（申込期間延長）

慶應義塾大学医学部は、1917（大正６）年に大学医学科として発足し、2017（平成29）年に開設100年を迎えます。そこで医学部開設100年記念事業の一環として下記の行事が開催されることとなりました。

まだお席に余裕がありますので、申込期間を延長いたしました。この記念すべき行事に是非ご参集いただき、これまでの100年の軌跡に感謝し、新しい時代の幕開けを共に祝いましょう。

参加申込方法：①インターネット申込（推奨）
https://www.100th-registration.med.keio.ac.jp
②お電話での申込み
慶應義塾大学信濃町キャンパス総務課：03-5363-3611
参加申込締切：2017年３月10日（金）
（既にお申込み済みの方には、振込用紙等を順次郵送いたします。）

記

開催日時：2017年５月13日（土）
13:00～16:00　記念シンポジウム（「慶應医学 － 次の100年に向けて」）
・山中伸弥 博士（京都大学）
・Dr. Fred H. Gage（Salk Institute for Biological Studies）
・御子柴克彦 博士（理化学研究所）
・北川雄光 教授（慶應義塾大学医学部外科学）
・金井弥栄 教授（慶應義塾大学医学部病理学）
・本田賢也 教授（慶應義塾大学医学部微生物学・免疫学）
・広瀬信義 特別招聘教授（慶應義塾大学医学部百寿総合研究センター）
17:00～18:00　記念式典
文部科学大臣、厚生労働大臣、海外の大学長クラス他より来賓祝辞を予定
18:30～20:30　記念祝賀会
慶應連合三田会会長他より来賓祝辞、学生企画、應援指導部によるステージ等を予定
開催場所：ホテルニューオータニ　「鶴の間」「芙蓉の間」
東京都千代田区紀尾井町４－１
会　　費：３万円（記念品代を含む。記念シンポジウムのみのご参加は無料。）

お問合せ先：慶應義塾大学信濃町キャンパス総務課 大古殿・吉岡・横田
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35
Tel 03-5363-3611　Email info-med100th@adst.keio.ac.jp

三四会奨励賞の推薦について

Young Investigator Award, Keio University School of Medicine Alumni Association（Sanshikai）

目的　若手の三四会会員の研究を奨励し、実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　1．次の各分野ですぐれた業績をあげた三四会正会員で三四会員として少なくとも１年は経過している者（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域等で業績をあげている三四会員も含む）
対象となる分野
イ、臨床医学　　ロ、基礎医学
2．満40歳以下

推薦方法
1．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
2．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会奨励賞推薦状）により候補者を推薦して下さい。
3．推薦締切りは**平成29年４月21日（金）**必着、三四会事務局宛とします。
4．提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、論文別刷（学術集会発表の場合はそれを証明するコピーと800字程度の抄録）、オリジナル１部とコピー10セットが必要です。
5．対象となる研究が共著論文の場合は共著者の**承諾書**（オリジナル１部とコピー10部）が必要となります。

※推薦状、略歴、論文、共著者の承諾書を順に組んで１部とし、コピーも同じ体裁に整えてください。
※推薦状のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL：http://www.sanshikai.jp/award/shourei/index.html

選考ならびに受賞
三四会奨励賞選考委員会による厳正な選考の結果、約８名程度の受賞者を決定します。受賞者は平成29年６月17日（土）に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

三四会社会功労賞の推薦について

目的　地域社会、社会貢献を通じて顕著な功績により三四会の名誉を高めた三四会員を表彰し実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　1．表彰目的に沿った優れた業績をあげた三四会正会員（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域等で業績をあげている三四会員も含む）
2．年齢は問わない。

推薦方法
1．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
2．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会社会功労賞推薦状）により候補者を推薦してください。
3．締め切りは、**平成29年４月21日（金）**必着、三四会事務局宛とします。
4．提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、表彰目的に沿った業績目録、客観的に評価しうる資料等、オリジナル１部とコピー10セットが必要です。

※推薦書のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL: http://www.sanshikai.jp/award/kourousyo/index.html

選考ならびに受賞
三四会長を委員長とする三四会社会功労賞選考委員会による厳正な選考の結果、原則１名の受賞者を決定します。受賞者は平成29年６月17日（土）に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

鑑賞随想

筆者は世に云う老人病院を開設して37年になる。この間に関わった高齢者は約1万3000人、看取った人の数も7000人を超える。その平均年齢は88歳である。

医学部を卒業して50年にもなるので現在の状況は知らないが、当時の医学教育の課程で叩き込まれた医療の役割は次の二つであったように思う。

その第一は身体や精神につき正常なる状態を設定し、そこから逸脱した部分を病気、異常とみなして、正常に戻すべく最大の努力をすること、第二は死を医療の敗北と位置付け、それを回避すべく、あるいは少しでも先に延ばすべく全力を尽くすことである。

高齢者の何たるかを知らずに病院を始めたとは云え、毎日の診療場面では大いに悩まされた。

まず、80歳超の高齢者となると検査すればいろいろな異常部分が発見される。それを病気と見るか否かは別にして、それを是正しようと各種の治療手段を講じても多くの場合改善されないばかりか、副作用が目立つ。つまり医療が役に立たないことになる。

さらに年を重ね、ある時期になるとどんな手段を取っていても急に衰えが加速され、死に至るのが普通である。

正常への復帰、死の回避を医療の役割の指標とするならば、まさに連戦連敗の歴史であったと云えよう。しかし、そんな実感は毛頭ない。

現代医学をもってしても老化による変化はいかんともし難く、その延長線上にある死も不可避であると知ることこそが出発点であり、現実的でもある。

併せて医療行為は受ける側にとっては苦痛と不安、そして時には惨めさえ伴う側面があることを思う時、高齢者への医療対応には、若人や一般成人とは別の視点が不可欠となる。

いわく「惨めな形での延命や長生きよりも、豊かで苦痛の少い一日をサポートする」、そしてその先に大往生を実現できれば、医療者への尊敬の念は蘇えるかもしれない。

（医療法人社団慶成会　大塚宣夫　45回）